

## 教育関係者のための「外国人児童生徒の特別支援スタンダード」作成の試み

鈴木ゆみ(関西学院千里国際キャンパス カウンセラー)

近年、多言語環境で育つ子どもの学習上の困難や問題行動が、言葉の理解の遅れからくるのか、文化的相違によるものなのか、それとも障害や発達に起因する課題によるものなのかという判断の難しさが支援者や専門家から指摘されている。そこで本研究では、文化的・言語的に多様な子ども(Culturally and Linguistically and diverse children:以下CLD児)の言語と発達についての理解と対応の指針となるようなガイドブックの作成を目的とした。研究1では、CLD児の言語と発達に関する先行研究を概観し問題の整理を行った。研究2では、CLD児との関わりにおける教師の困難さに焦点をあてたインタビューの分析を行った。研究3では、専門家からのアドバイスを受けてハンドブックの内容を検討した。

### 【研究1】言語と発達のアセスメントに関する先行研究の概観

言語について、CLD児の第二言語の習得と教科学習には、長期間に及ぶ獲得と成長のプロセスがあることが明らかになった。発達については、CLD児の認知特性(WISCに代表されるような発達検査)の評価の難しさ、および行動上の問題と言語や発達の課題との判別の困難さが指摘された。先行研究を概観した結果、CLD児のアセスメントについては、①複数言語による知能検査の実施、②言語能力検査や、多言語での読み書きの評価等の言語のアセスメント、③ASDやADHD等の発達障害のアセスメント、④CLD児の学校や家庭における行動観察、⑤保護者への面談での聞き取り、の5つの観点が必要であることが示された(鈴木・栗原・榊原、2021)。

### 【研究2】CLD児とのかかわりにおける教師の経験と感情 一困難さに焦点をあてて一

[方法] 1)対象者:公立の小中学校に在籍するCLD児の指導を担当する教員7名(女性7名)。2)時期:2022年6月より2023年3月。3)質問項目:教師が難しいと感じる場面や状況、その時の教師の考え、その時の気持ちや心情、その時のかかわりや対応、あるとよいと思われる知識やスキル、情報であった。半構造化面接。

[結果と考察] KJ法による分析の結果、①要因の特定の難しさ、②具体的な指導や支援の難しさ、③連携の難しさと相談情報不足、④保護者とのコミュニケーション、④教師の感情体験、の5つのカテゴリーが見出された。

カテゴリー名	説明
要因の特定の難しさ	日本語/母語がどれくらいできるのか、社会・文化的な差異の影響があるか等、要因の特定の難しさ。
具体的な指導や支援の困難さ	日本語指導、教科指導、学校環境への適応等、どのような指導や支援をするべきなのか分からない。一斉授業における個別対応の難しさ。
連携の難しさと情報の不足	(校内において)どこにつなげればよいのか分からず、受け皿がない。(外部の相談機関について)教員や学校が情報を得たり活用することが難しい。
保護者とのコミュニケーション	日本語でのやりとりが難しいことに加え、教育制度や学校文化が異なる故に生じる誤解やステレオタイプがある。病気や障害に対する見方(障害観)の違い。
教師の感情体験	「かわいそう」「申し訳ない」といった憐憫の感情。指導や支援の難しさからくる困り感やあきらめの感情。

### 【研究3】専門家によるアドバイス

○認知心理学の研究者:現在日本でされているアセスメントは、基本的に日本語を母語としている子どもを対象としているため留意が必要である。○言語心理学の研究者:正確に言語発達を測る(アセスメント)ことは極めて難しい。どのような困難を抱えているのか(読み書きなのか、音声なのか)を具体的にみるとともに、言語環境や語彙などの詳細な情報を得る必要がある。○児童精神科医師:病気や障害、言語に関する科学的知見の重要性。支援者の知識の向上、障害のあるCLD児を支える学校の役割。○障害学生研究者:CLD児(や保護者)の言葉に耳を傾け、安心感、安全感を持ってもらうことが大切である。

### 【まとめと今後の課題】



書籍においては、CLD児の実態を把握する方法としてのプレ・アセスメント、および校内における情報共有と連携・協働についてのモデル化を試みた。CLD児の言語と発達のアセスメントについては未だ明らかにされていないことが多く、今後さらなる実証的な研究の蓄積が望まれる。また、教師や支援者が安心してCLD児を指導、支援することができるような仕組みや制度をつくることも取り組むべき課題である。

共同研究者:榊原佐和子・栗原友佳・松本(朝倉)理恵 研究協力者 加納重美・小中佳子